

東レ科学技術賞受賞者挨拶

慶應義塾大学医学部教授 吉村 昭彦



この度は、栄えある東レ科学技術賞を賜り、大変光栄に存じます。東レ科学振興会の皆様、清水孝雄先生をはじめとする選考委員の皆様、そしてご推薦頂いた日本生化学会の皆様に厚く御礼申し上げます。今回の受賞対象となりました研究は35年の長きにわたる、スタッフ、大学院生、多くの国内外の共同研究者の皆様のご協力とご支援により成し遂げられたものです。改めまして皆様に深く感謝申し上げたいと存じます。

実は東レ科学振興会の贈呈式に参列するのは今回が2回目です。最初はここに来られている若い皆さんと同じ年齢の頃、久留米大学で小さな研究室を主催することになって間もない1997年のことでした。何しろ実験用のサララップですら近所のスーパーの特売で購入していたのですから、当時の1,000万円という研究助成金は駆け出しの教授にとって、言葉に表わせないほどありがたい支援でした。その時の研究課題は「CISファミリーによるサイトカインシグナルの制御機構と生理機能」でした。本日いただいた科学技術賞はまさにこの研究課題を発展させたものです。

サイトカインは、コロナの重症化に関わる、ということでテレビなどでも取り上げられたこともあって最近よく耳にするようになりました。もともとは細胞と細胞の間の情報伝達を担う因子で、生理的にも極めて重要ですが、暴走すると感染症だけでなくがん、アレルギー、神経疾患など多くの疾患と密接に関係することが知られています。私どもはこのサイトカインがどのように遺伝子発現を制御するのかを細胞や分子のレベルで解明してきました。特にCIS、SOCS、SPRED、NR4aといった我々が発見した分子はサイトカインの負の調節因子で、自己免疫疾患、アレルギー、神経繊維腫症などの病気に関わることを明らかにしました。さらに最近ではこれらの分子群は免疫が自己や無害なものに反応しない現象、すなわち免疫寛容と呼ばれる現象に必須の役割を果たすことが判明し、複雑な免疫寛容の全体像が分子レベルで見えてきました。一方でこれらの分子を阻害することで、がんの免疫療法を画期的に改善できる可能性を示すことができました。私事ながら、先日従兄弟がまだ50歳の若さで肺がんのために亡くなりました。このような人を一人でも減らしたい。これまでの基礎研究の成果をもとに、今後はがんの新しい治療法の開発を目指していきたいと考えています。

こうして研究者として曲がりなりにも足跡を残せたのは東レ科学振興会をはじめとする多くの方々、団体のご支援によるものです。改めて感謝申し上げます。また貴振興会には今後も若手の登竜門としての発展を祈念いたします。最後に私に研究三昧を許し、辛抱強くサポートしてくれた妻にこの場を借りて感謝いたします。この度は誠にありがとうございました。